テイルの統語論

小　林　亜希子

1. イントロダクション

日本語のテイル文が複数の解釈を持つことはよく知られている。本稿は三原（1997）の分類と用語法に従って議論を進める。

（1）a. 動作持続：　太郎は　今　台所で　働いている。
　　b. 結果持続：　ここに　財布が　落ちている。
　　c. 状態持続：　太郎は　悩んでいる。
　　d. 効力持続：　太郎は　10 年前に　アメリカを　訪れている。

（1 a）のテイルは「太郎が台所で働く」動作が言及時（発話時）において持続・展開中であることを表す。（1 b）のテイルは「財布が落ちる」ことがすでに起こり，その結果が残存していることを表す。（1 c）のテイルは「太郎が悩む」状態が持続していることを表す。（1 d）のテイルは「太郎が 10 年前にアメリカを訪れた」ことが経験・思い出となり，言及時にまで及ぶ何らかの効力を有していることを表す。

2 節で見るとおり，先行研究の多くはテイルの中心的な意味を（1 a）の動作持続と（1 b）の結果持続としている。本稿の議論も，この 2 つのテイルに関心を絞って進める。以降は便宜上，動作持続の（i）意味そのもの，あるいは（ii）その意味のテイル文に現れる助動詞（テ）イルを「D テイル」，結果持続の（i），（ii）を「K テイル」と表記する。

国語学・日本語学での主な関心は，テイル文がどういう場合にどの解釈を持つのかという解釈規則を明らかにすることであるが，本稿の関心は次の疑問に答えることである。

（2）D テイル文と K テイル文は統語的に異なるのか？　もしそうだとすれば，どう異なるのか？

可能な選択肢として，次のようなものが考えられる。

(3) a.（テ）イルは 1 つの語彙素であり，テイル文の統語構造も 1 つしかないが，その統語構造は意味が未指定（underspecified）である。意味解釈部門で解釈規則が適用されることによってテイル文の意味が特定される。

b. D テイルと K テイルは異なる語彙素であり，異なる選択特性を持つため，それぞれのテイル文の構造が異なり，異なる意味解釈を割り当てられる。

c.（テ）イルは 1 つの語彙素であるが，統語構造での現れ方の違いにより，異なる解釈を割り当てられる。

テイル文の意味解釈規則を明らかにしようとする多くの先行研究は，おそらく（3 a）を暗黙の前提として議論を進めていると思われる。他方，（3 b）を想定していると思われる研究者も複数いる。（シ）テイルの多義性に関心を持つ工藤（1995），岩本（2008）などがそれにあたるかもしれない。4 節で見るように，明確に（3 b）を主張する研究もある（三原 1997, Ogihara 1999）。

本稿は，（3 c）に基づく分析を提案する。具体的には次のとおりである。

(4) a. D テイル：[$_{vP2}$ [$_{VP2}$ [$_{AspP}$ [$_{vP1}$ 太郎が 歌い(-テ)] [$_{Asp}$ Ø]] イル]]

b. K テイル：[$_{vP2}$ [$_{VP2}$ [$_{AspP}$ [$_{vP1}$ 太郎が 来] [$_{Asp}$ テ]] イル]]

助動詞イルは持続の意味を担う。イルは AspP を選択するが，その主要部は事象の「開始点」を意味するØと「終了点」を意味するテの 2 つがありうる。その AspP の下にもう一つの vP が埋め込まれる。（以降，テイルの下に埋め込まれる vP/VP を vP1/VP1，VP1 の主要部を V 1 と表記する。）（4 a）が音声部門で発音される際，V 1 に直接イルが接続することができないので，テが挿入される。このテ挿入は形態論的理由によるものであり，意味はない。（4 a）の構造は D テイルに写像される。一方，（4 b）ではイルが選択する AspP の主要部がテであるが，これがいわゆる「パーフェクト」（工藤 1995）の意味を持つ。この AspP を含むテイル構造は K テイルに写像される。つまり，イル自体は同じ 1 つの語彙素であるが，AspP との組み合わせによって異なる解釈となる。

本稿の構成は以下のとおりである。まず2節でテイルの意味論を扱った先行研究を概観し，テイルが大きくDテイルとKテイルに区別されることを確認する。3–4節では，テイルの統語論を論じた先行研究を批判的に検討する。データ自体の問題，提案される分析の経験論的・概念論的な問題を指摘し，新たなデータも加えて再検討すると，Dテイル，Kテイルともに繰り上げ述語であると考えるべきであり，（3 b）を積極的に支持することはできないことを示す。5節で新たなデータを提出し，（3 c）にもとづく新たな分析を提案する。6節で論をまとめる。

2. テイルの意味論

本節では，寺村（1984）の考えるテイルの中心的意味からD，Kテイルの意味がどのように現れるのか，また共起する要素がテイルの可能な解釈をどのように制限するのかを示す。ただし，本稿の目的はテイルの統語論であるので，本節の記述は3節以降の議論に最低限必要なものにとどめる。より詳しいレビューは岩本（2008）などを参照されたい。

（シ）テイルの研究は金田一（1950）から本格的に始まったと言われる。その概念論的・経験論的な問題点を指摘し，修正・発展を目指す多くの研究が生まれた（e.g. 藤井1966，奥田1978）。しかし，これらの研究が目指すのはテイルをテストツールにした「動詞の分類」であり，テイルそのものの意味を追求することではない。テイルの統語論を明らかにする目的のためには，テイルそのものの意味が何かを知る必要がある。本節では，その観点から研究を行う寺村（1984）らの分析を概観し，テイルの中心的な意味がD，Kテイルであることを確認する。

テイルそのものの意味について，研究者の見方は大方一致している。

（5）寺村（1984：127）
～テイルの中心的な意味は「既然の結果が現在存在していること」である[。]

（6）三原（1997：112）
「テイル」の中核的な意味が，何らかの意味での「持続」であることは間違いない[。]

（7）高見・久野（2006：118）

「～ている」の表わす意味：「～ている」形は，ある動作・作用・あるいはその後に生じる結果状態が，「～ている」形が指し示す時点において進行し，連続（継続）していることを表わす。

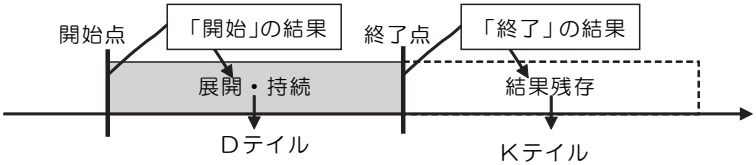
（8）Shirai（2000：333）

…the general meaning that *-te i-* conveys is ‘focus on the durative phase of a situation’, and also that *-te i-* can be generally characterized as ‘durative imperfective’.

「何らかの状態の持続」をテイルが表すと考えてよいであろう。

それでは，この中心的意味からDテイル，Kテイルの解釈がどう生じるのだろうか。寺村の表現を用いて説明する。次の図は，開始点と終了点を持つ事象の時間的展開を表したものである。

（9）



寺村の「既然」とは，事象が開始すること，終了することのいずれかを指す。テイルはこれらいずれかの変化が起こったことによる結果が言及時に存在することを表す。既然の可能性が2つあるため，テイルの解釈も大きく2つあることになる。図のとおり，事象が開始される結果はその事象が展開・持続すること（Dテイル）である。また，事象が終了し，それがもたらす変化状態が結果として残されること（Kテイル）もある。すなわち，テイルは（終了後の結果残存も含む）事象のうち，「既存の結果」にあたるアスペクト段階を切り出す働きを持つのである。

この考えに基づき，動詞の語彙アスペクト（Aktionsart）がテイルの可能な解釈をどう制限するか見ていく。ただし，Aktionsartのタイプは動詞だけでなく，動詞と目的語の組み合わせによって決まることに注意されたい。Shirai（2000）で詳しく論じられているが，「（一枚の）皿を置く」のは瞬間的事象だが，「（複数の）皿を置く」のは継続的な事象である。従って，Aktionsartを決めるときには少なくとも「動詞＋目的語（あれば）」を単位として考える必要

がある。以下，（9）に示した基本的考えからテイルの可能な解釈がいかに制限されるかを，Aktionsart のタイプごとに見ていく。

まず，活動動詞（「走る」），達成動詞（「ご飯を作る」）のように，開始点・終了点が設定され[1]，2 つの点の間に時間幅がある場合を考えよう。この場合は，（9）の図に示すとおり，テイルは D テイル，K テイル両方の解釈を持つ可能性がある。ただし，K テイル解釈を得るには，事象が終了した「結果」が何か，話し手・聞き手が特定できねばならない。この「結果」だが，動詞＋目的語の語義から論理的に含意（entail）されるばかりではない。次の例を見てみよう。

（10）a．母が　ご飯を　作っている。
　　b．太郎が　走っている。

ご飯を作れば，必ず「ご飯」が結果として存在するため，（10 a）はその作業の持続状態（D テイル），作業の結果状態（K テイル）どちらの解釈も容易に得ることができる。一方，走ることでどういう結果が残されるのかは明らかでないので，文脈なしに（10 b）を見れば，D テイル解釈しかできない。しかし，結果を文脈から推意（imply）できるのであれば，K テイル解釈をすることも可能である。例えば，ジョギングした後でチェックシートに印を入れる習慣を太郎が持っていたとしよう。この場合，「チェックマーク」が走ることの結果として現れるので，例えば話し手がそのチェックマークを見ながら発話したとすれば，（10 b）は K テイルの解釈を持ち，容認される[2]。

1　達成動詞の終了点は，目的を達成したときに必然的に訪れるものであるが，活動動詞の終了点は動作主（Agent）が任意に設定するものである，という点で異なる。しかしながら，活動動詞の表す事象は半永久的に続くことはなくいずれ終了する。従って，どこかに終了点があることは常識により想定される。ここで言う「終了点」はこの終了点も含む。

2　このように，活動・達成タイプのテイル文で D, K テイル両方の解釈がありうることは，(9) の基本的考えだけを採用すれば自然に帰結する。しかし，多くの先行研究は K テイル解釈にさらなる条件を課すので，K テイルの範囲はこれよりも狭くなる。例えば，工藤（1982, 1995）や三原（1997），Shirai（2000）らは，K テイル［結果持続，結果継続］は次の条件を満たさねばならないとする。
（ⅰ）　動詞句の語義から必然的に得られる結果があること
（ⅱ）言及時（発話時）にその必然の結果が残存していること
（ⅲ）主体（主語）が変化を受けること　（ただし，無意志動詞の場合を除く）
（10 a）で変化するのは目的語であるため（iii）が満たされず，（10 b）は文脈に依存する

次に，開始点と終了点がほぼ同時となる，いわゆる到達動詞(「到着する」「電話を切る」)の場合を考える。この場合，事象そのものが持続することはなく，D テイル解釈はありえない。これらの動詞は瞬間的な変化を表すものが多いので，結果を想定しやすく，K テイル解釈を持つ。しかし，到達動詞の中には少数ながら，「一瞥する」「遭遇する」のように結果を想定しにくいものがある。つまり，事象そのものの持続も結果状態の持続も想定することができない。この場合は，D，K テイル以外のテイル解釈が与えられる。

第三に，状態動詞（「ある」「いる」）が表す事象では，開始点・終了点のいずれも設定できない。変化点がなければその結果もあり得ないので，このタイプの動詞にテイルが付くことはない。

このように，テイルの中心的意味と動詞（＋目的語）の組み合わせからテイルの可能な解釈が決まる。寺村や三原，高見・久野はさらに，D，K テイル以外の意味がいかに派生するのか，また第四種動詞のテイルの扱いについても説明するのだが，本稿の目的とは外れるため省略する。上記の論文を参照されたい。

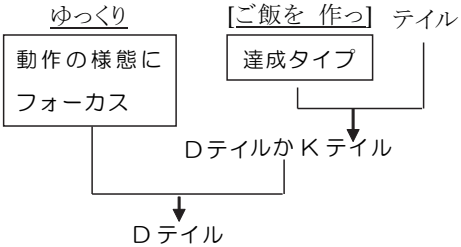
また，（10 a，b）のように D，K テイル両方の解釈が可能であっても，「ゆっくり」「もう」などの修飾要素がさらにテイルの解釈を狭めることが知られている。あるいは，受身文では K テイル解釈が好まれることもよく指摘される。この意味の限定の仕方についても，工藤（1982），三原（1997），高見・久野（2006），岩本（2008）などの議論を参照されたいが，簡単に述べると，両方の解釈が可能であるときは，修飾要素がフォーカスするアスペクト段階と一致する解釈をテイルも持たねばならないと言える。

まとめると，テイルは既然の結果の存在を表すが，「既然」は事象の開始点・終了点のいずれかであるので，テイルがどちらの既然に関わるかにより，大きく D テイル，K テイルの解釈が存在する。動詞（＋目的語）の表す Aktionsart のタイプにより，どちらの解釈ができる（できない）のかの潜在的可能性が定まり，副詞要素が表すフォーカスがその可能性をさらに限定する。つまり，文

偶然の結果を表すので（i）が満たされない。彼（女）らの分類では従って，（10 a，b）は効力持続またはパーフェクトのカテゴリーに入る。しかし，これは K テイルと効力持続の線引きの仕方に違いがあるというだけで，彼らと本稿の考えの間に本質的な違いがあることを意味しない。本稿は (i)-(iii) の基準を設けることはせず，偶然・必然，主語変化・目的語変化に関係なく，事象が終わり，その結果が何かしらあることを示しているテイル文は「K テイル」とする。

と文脈の要素から，テイルが取る意味を特定することができる。テイルの意味の限定の仕方を図で示してみると，次のようになる。

(11)



この議論を踏まえて，(2) の疑問に戻ろう。

(2) D テイル文と K テイル文は統語的に異なるのか？　もしそうだとすれば，どう異なるのか？

(11) のような意味の計算が働いてテイルの意味が決まるとすれば，D テイルと K テイルが統語的に異なると考えるべき必要は特にない，ということになる。意味解釈規則を立てて（シ）テイルの意味を論じる研究者の多くは，明言しないものの，(3 a) を暗黙の前提としていると考えられる。

しかしながら，三原 (1997)，Ogihara (1999) など，異なるテイルは語彙的・統語的に異なると主張する研究者も皆無ではない。つまり，(3 b) に基づく主張である。4 節では，彼らが提出するデータと分析を見るが，いずれも経験論的・概念論的問題があることを指摘する。データを再検討すると，D テイルと K テイルが統語的に異なると結論することはできないことを示す。

3. テイルの統語論（1）：非テイル文とテイル文の違い

3–4 節ではテイルの統語論を扱った先行研究を見ていく。まず本節で，テイル文と非テイル文が異なる統語構造を持つことを示す。テイル文と非テイル文が違うことは確かであるが，先行研究が提案する分析では関連するデータをうまく説明できないことも明らかにする。

3.1 テイルは述語句を選択する

三原（1997）は，V1 とテイルが統語的に結合する証拠として，次の例を挙げる。（12 a–c）は D テイル，（13 a–c）は K テイルの例である。

（12）a. 土井さんが運動場で走っている。よく見ると，向こうの方で奥さんもそうしている。
b. 田中先生は隣の部屋でお休みになっている。
c. 最近この本はよく読まれている。（三原（1997 : 148））

（13）a. 主人は先週から軽井沢に行っています。夏休みはいつもそうしています。
b. 山田先生が今，こちらにおいでになっている。
c. 花瓶が割られている。（三原 （1997 : 149））

（12 a）では，「走っている」のうち，「走る」だけが「そうする」で置き換えられ，それにテイルが接続する。（12 b）では，「休む」が主語尊敬化して「お休みになる」ができ，それにテイルが接続する。（12 c）では，受身化した動詞「読まれる」にテイルが接続する。（13）の K テイル文も同様である。「そうする」置き換え，主語尊敬化，受身化はいずれも統語的派生であるので，その外側にテイルが現れる事実は，V＋テイルは語彙部門で生成されるのでなく，統語的に派生することを表している。

語彙部門で生成される複合動詞（e.g.「V1 し込む」，「V1 し返す」，「V1 し開く」）の場合，その内部に統語操作が及ぶことはないので，V 1 の部分に統語操作を加えた次の例は容認されない。

（14）a. この書類に必要事項を書き込んで下さい。*そうし込んだら，次に・・・
b. *先生は「えっ？」と　お聞きになり返しました。
c. *大きな鉄の扉が　押され開いて・・・（三原（1997 : 146））

以上のデータから，テイルは述語句を選択し，V1 と統語的に結合すると言える。三原は文（S）埋め込み構造を考えているが，時制・一致要素が埋め込み句にあると考えるべき理由がないので，本稿では述語句の埋め込みとする。

3.2　テイル文の外項は（一見）VP 1 内にある FNQ を認可できる

3.2.1　データ

テイル文の外項は，非テイル文のそれと異なり，一見局所的関係にない遊離数量詞（FNQ）を認可できることが，三原（1994），Miyamoto（2006）で指摘されている。まずは非テイル文の例を見てみよう。

（15）a.　僕の友達が　2 人　［VP　神戸で　鈴木に　会った］　そうだ。
　　b.　*僕の友達が　［VP　神戸で　2 人　鈴木に　会った］　そうだ。
　　c.　??子供が　［VP　輪になって　2 人　踊った］。（三原（1994：141））

場所や様態の付加詞は VP 内要素であるので，それに後続する FNQ は VP 内にあるはずである。（15 a）と（15 b，c）の文法性の対比から，外項は VP 内にある FNQ を認可できないことが分かる。FNQ 認可の局所性条件として Miyagawa（1989）の相互 c-統御条件があるが，二股枝分かれ構造で相互 c-統御はあり得ないので，「DP は FNQ を統率（govern）せねばならない[3]」という局所性条件を立てることにする。（15 a）の FNQ は外項と同じ TP（または vP）内にあり，統率されるから問題ない。一方，（15 b，c）の FNQ は VP 内にある。外項からは VP が障壁となり，FNQ を認可できない。

興味深いことに，テイル文では，外項が（一見）VP 内にある FNQ を認可できる。

（16）a.　子供が　［VP　狭い公園で　100 人も　遊ん］　でいた。
　　b.　水着姿の女性が　［VP　楽しそうに　5 人　泳い］　でいた。
　　（三原（1994：145）より改変）

これらはいずれも D テイルの例である。K テイルの例は三原（1994）では扱われていないが，Miyamoto（2006）は K テイルの例を用いて同様の観察をしている[4]。（17 a，b）の容認度の違いから，K テイル文の外項も（一見）VP 内

3　簡潔さの便宜から「統率」の概念を用いているが，極小理論の理念に沿った説明をすることも可能である。注 14 を参照されたい。

4　Miyamoto の議論は非完結相全体にかかわるが，本稿の議論に関係するテイル文の例だけを取り上げる。

にある FNQ を認可できることが分かる。

(17) a. ?*阪大生が ［VP 高い教科書を 3人 買わ］ なかった（こと）
b. ? 阪大生が ［VP 高い教科書を 3人 買っ］ ていない（こと）
（Miyamoto（2006），（11 a, b））

Miyamoto は，FNQ と否定のスコープ関係を見るために否定辞を含む例を用いているが，否定辞がなくても文法性に変わりはない。

(18) a. 学生が ［VP 高い教科書を 3人 買っ］ ている（こと）
b. 学生が もう，［VP 提出箱に レポートを 3人も 提出し］ ている（こと）

以上の例から，D テイル，K テイルいずれの文においても，外項が（一見）VP1 にある FNQ を認可できることが分かる。

3.2.2 三原の分析と問題点

前節で見たデータを，三原（1994），Miyamoto（2006）がどう説明しているのか見ていこう。まず三原によると，例えば（16 a）は次の構造を取る。

(19) ［IP 子供$_i$ が ［VP ［IP e_i ［VP 狭い公園で e_i 100 人も 遊ん-で］］ いた］］
（三原（1994：146）より改変）

テイル文の外項は内項位置に生起できる，と三原は主張する。ゆえに，「子供」は埋め込み節の内項位置に生起する。しかし，自動詞の内項位置では格を得ることができず，A-移動が起こる。非定形の埋め込み節では主語位置に繰り上がっても格がもらえないので，最終的に主節の主語位置に繰り上がってガ格を得る。この分析によれば，主語はもともと VP 内項であるため，VP 内の FNQ を認可できるのである。

しかしこの分析には問題がある。まず，動作主（外項）がテイル文に限っては内項位置に生起できる，というアドホックな想定自体が問題である。さらにこの分析は，（18 a，b）のような他動詞を V 1 とする例を説明できない。VP1

の内項位置は真の内項によって占められるはずであるから，外項は外項位置に現れるしかない。従って，VP 内の FNQ は容認されない，と間違った予測をしてしまう。このように，三原の分析は概念論的にも経験論的にも問題であり，支持できない。

3.2.3　Miyamoto の分析と問題点

次に，Miyamoto（2006）の分析を見てみよう。彼の主張は次のようにまとめられる。

（20）a．テイルは文を［＋状態］にする。
　　b．［＋状態］文の主語は，大主語としてトピック位置に基底生成し，pro を束縛する。
　　c．大主語は EPP を満たさないので，他の要素が主語移動する。

この分析によると，（18 a）は次の構造を取る。

（21）［$_{TP}$ 学生が$_i$［$_{TP}$ 高い教科書を$_j$［$_{vP2}$［$_{vP1}$ pro$_i$ 3 人［$_{VP}$ t_j 買って］］いる］］

「学生が」は，大主語としてトピック位置に生起する。EPP を満たすのは pro でもよいが，この場合は目的語「高い教科書を」が選ばれている。目的語はこの移動により VP 内要素ではなくなる。従って，目的語に後続する FNQ「3 人」は，図のように vP にあると分析することが可能となる。この FNQ が pro から認可を受けられるので，（18 a）は容認される。

なお Miyamoto は，FNQ に先行する目的語が顕在的に A 移動している証拠として次の例を挙げる。

（22）a．（今までに）阪大生が 2 人 全てを 読んでいない。（全て＞＜ない）
　　b．（今までに）阪大生が 全てを 2 人 読んでいない。（全て＞ない）
　　（Miyamoto（2006），（44 a, b））

「全てを」が FNQ に後続する（22 a）では，「全てを」が否定辞よりも狭いスコープ解釈をもつことができるが，FNQ に先行する（22 b）では，「全てを」の

広いスコープ読みが義務的である。Miyamoto は，A 移動は痕跡を残さないと前提し，（22 b）のスコープ解釈は，「全てを」が A 移動する証拠であると論じる。EPP を満たすために A 移動した「全てを」は，痕跡を残さないので再構築できず，広いスコープ読みが義務的となるのである。なお，（22 a）の EPP は，pro の移動により満たされる。「全てを」は VP 内にとどまるので，狭いスコープ読みが可能である。

しかし，この分析にも経験論的な問題がいくつか考えられる。まず，次の例から明らかなように，大主語になれるのは外項（に相当する句）に限らない事実を確認しておこう。（[e]は，大主語に相当する句が空であることを表す。大主語がこの位置から移動するのか，この位置にある pro と束縛関係により関係づけられるのか，本稿では論じない。）

（23）a．太郎が ［DP ［e］ノ 妹］-が 歌手だ。

b．この辞書が ほとんどの学生が ［e］ヲ 利用する。

（杉本（1995：87, 89））

c．そのおもちゃが 子どもが よく ［e］デ 怪我をする。

（杉本（1990：172））

この事実と Miyamoto 分析を合わせると，次のことが予測される。テイル文の大主語位置に外項以外の要素が現れた場合，vP–Spec 位置には pro でなく，顕在的な DP が現れる。外項 DP は TP–Spec に移動し，内項 DP は VP 内にとどまる。内項 DP に後続する FNQ は VP 内にあるはずであるから，（24）に示すとおり，外項は FNQ を認可できないはずである。

A-移動

（24）［TP 大主語［TP 外項 i［vP1［vP2 t_i［VP 内項 FNQ V-て］いる］］］］

認可できない

しかし，この予測は成り立たない。次の例では外項以外の大主語が現れ，FNQ が目的語に後続しているが，いずれも容認される[5]。

---

5 4.1.2 節で見ることだが，多重主語構文の大主語には何らかの「特徴づけ」が必要である。（25），（26）が不自然に感じられるとしたら，その大主語「法文学部」「あの店」に特徴づ

(25) a. 法文学部が 今 [[e]ノ 学生]-が 閲覧室を 2人 使っている。
(Dテイル)
b. 法文学部が もう [[e]ノ 学生]-が 論文を 2人 提出している。
(Kテイル)

(26) a. あの店が 今 学生が [e]ニ 酒を 2人 運び込んでいる。 (Dテイル)
b. あの店が もう 学生が [e]ニ 酒を 2人 運び込んでいる。(Kテイル)

つまり，内項がVP外に出なくても，それに後続するFNQは外項から認可されうる，と考えねばならない。

より根本的な問題として，Miyamoto分析では日本語にもEPPのあることが前提となるが，その前提自体に疑問がある。EPPの存在を支持するデータとしては，例えば次のようなものがある。

(27) a. 太郎は [$_{vP}$ 誰を 責め]-も しなかった。
b. 太郎は [$_{CP}$ 誰が バカだと]-も 思わなかった。
c. *誰が$_i$ [$_{vP}$ [e]$_i$ 花子を 責め]-も しなかった。
(Hiraiwa (2005 : 96, 100, 98))

Hiraiwaは(27 a–c)の文法性を次のように説明する。不定語「誰」はモと結びつくことで否定極性要素となる。モは排出(Spell–Out)時に，不定語(の連鎖の頭部)をc-統御していなければならない。(モの統語位置などの詳細は省略し，XPに付加したモはXP内の要素をc-統御できると考える。詳しくは小林2009を参照されたい。)(27 a, b)では，vP, CPに付加したモがその内部の不定語「誰」をc-統御しており，問題はない。(27 c)の非文法性は，EPPを用いて次のように説明される。モはvPに付加しているが，不定語「誰」はEPP移動によりvP外に出る。移動のコピー([e])は認可の対象でないので，「誰」は正しく認可を受けられず，(27 c)は非文となる。

しかし，次の例を見てみよう。

けが与えられていないからである。特徴づけを与える文脈を作る一つの方法は，大主語が答えとなるような質問(「どこの学生が今閲覧室を使っているの？」「どの店に学生が2人酒を運び込んでいるの？」)がすでに文脈にあると見なすことである。この場合，いずれの例も容認される。

(28) a. *誰が 走り-も しなかった
b. *(その時) 誰が 走り-も していなかった
c. (その時) 誰が 走って-も いなかった。 (D テイル)
(29) a. *誰が ご飯を 作り-も しなかった。
b. ?*(その時) 誰が ご飯を 作り-も していなかった。
c. (その時) 誰が ご飯を 作って-も いなかった。 (D テイル)
(30) a. 何が 壊れ-も しなかった。
b. 何が 壊れ-も していなかった。
c. 何が 壊れて-も いなかった。 (K テイル)
(31) a. *誰が その小包を 受け取り-も しなかった。
b. ?*誰が その小包を 受け取り-も していなかった。
c. 誰が その小包を 受け取って-もいなかった。 (K テイル)

いずれも表層主語が不定語である。モは V 1 またはテに後続しているので，モが付加するのは vP 1, あるいはそれよりも上位で vP 2 より下にあるどこかの投射である。

(b, c) がテイル文であるが，容認できる例があることに注意されたい。これが Miyamoto の大主語分析のみならず，日本語 EPP 想定への反例となる。まず，表層主語が大主語であるのなら，(b, c) 文の不定語主語は全て，モの c-統御領域外にあるため容認されないはずである。大主語を想定しなくても, EPP を想定するかぎりこれらの文の文法性は説明がつかない。表層主語が TP-Spec に顕在移動すれば，モの c-統御領域外に出てしまうからである。容認される例がある事実は，表層主語が述語句にとどまりうることを示している。日本語に EPP があると考えることはできない。((28)-(31) の文法性の説明は 5 節で行う。)

日本語に EPP があることを示す別の「証拠」として，Miyagawa (2010) の例を考えよう。

(32) a. 全員が 試験を 受けなかった。 (全員＞ない)
b. 試験を 全員が 受けなかった。 (全員＞＜ない)
(Miyagawa (2010 : 75))

Miyagawa によると，日本語の EPP は英語のそれと異なり，フォーカス解釈されるものを誘引する。(32 a) では外項「全員」が A 移動するが，A 移動は再構築されないので広いスコープ解釈が義務的となる。一方，(32 b) において EPP を満たすのは目的語「試験を」である。外項「全員」は vP 内にとどまるので，狭いスコープ読みも可能となる。

しかし，(32 a，b) のスコープ解釈は EPP を想定しなくても説明がつく。小林 (2009) が論じているように，日本語のフォーカス句はその統語位置によらず常に広い解釈を持つからである。次の例を見てみよう。

(33) a. 花子は ケーキも 食べなかった。　(も＞ない)
　　b. 花子だけ ケーキも 食べなかった。　(も＞＜ない)
　　(小林 (2009 : 123, 142 より改変))

とりたて詞モは何かの前提に新情報を加えることを表すため，フォーカス解釈を受けやすい。(33 a) の「ケーキも」は F(ocus)P の主要部　F と一致する最上位の候補であるので，フォーカスと認定され，広いスコープを取る。(33 b) では，他のとりたて詞ダケがさらに上位にある。この場合，F はそちらと一致するため，「ケーキも」はフォーカス認定されず，広いスコープを取る必要がない。これが正しければ，(32 a，b) のデータは EPP を用いなくても説明できる。つまり，(とりたてられる DP が特になければ) 最上位にある DP が F と一致するためにフォーカス認定され，広いスコープ解釈が義務的となるのである。

まとめると，不定語の認可可能性 (27)，スコープ解釈可能性 (32) のいずれのデータも，日本語に EPP があることを支持する証拠として不十分である。(28)-(31) の例を見る限り，日本語に EPP はないと考える方が妥当であろう。そうすると, EPP を前提とする Miyamoto　分析の妥当性は大きく損なわれる。

本節の議論をまとめると，次の 2 点はテイル文の性質として認めてよい。まず，テイルは述語句を選択し，統語的に V 1 と結合する。また，テイル文の外項は，(一見) VP 内にある FNQ を認可できる。後者の性質について，その説明を試みた三原 (1997)，Miyamoto (2006) の分析を検討したが，いずれの分析にも概念論的・経験論的な問題があることが示された。データを説明する，新しい分析が必要である。

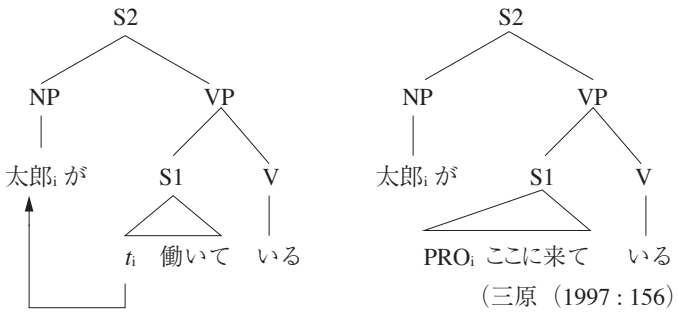
4. テイルの統語論（2）：D テイル文と K テイル文の違い

この節では，異なるテイルが異なる語彙的・統語的特徴を持つとする先行研究 2 つを批判的に検討する。4.1 節では三原（1997）を取り上げる。三原はまず，3.1 節のとおりテイルが述語句を埋め込むことを示したうえで，D テイルと K テイルが異なる埋め込み構造を取ることを様々なデータから主張する。具体的には，D テイルは繰り上げ述語，K テイルはコントロール述語であると主張する。まず，三原の提案する構造を示してから，その分析の証拠となるデータを検討しよう。その中で，三原の提示するデータには少なからず問題があることを論じていく。4.2 節では Ogihara（1999）の主張するテイルの語彙的違いも検討する。しかし，これにも問題があり支持できないことを示す。

4.1 三原の分析と問題点

三原は，D, K テイル文が次の構造を持つと主張する。

(34) a. D テイル　　b. K テイル



（三原（1997 : 156）より改変）

D テイル文に現れる主語は S1 に生起して主節に繰り上がる。一方，K テイル文の主語はテイルの外項として主節に生起し，S1 の PRO をコントロールする。以下，この分析で関連するデータがいかに説明できるか見ていこう。

4.1.1 テイルが場所項を取れるかどうかの違い

三原は次の例から，K テイルは独自に場所項を選択できると論じる。

(35) a. 僕の目の前で，少年兵が処刑されていた。　(D テイル)
　　b. 僕の目の前に，少年兵が処刑されていた。　(K テイル)
　　(三原 (1997 : 139))

V1「処刑される」は，ニ格の場所項を選択できない (「*僕の目の前に，少年兵が処刑された」) ので，(35 b) のニ格項はテイルが選択しているはずである。同様の例を他にも作ってみる。

(36) a. 冷蔵庫に アイスが 冷えていた。　(*冷蔵庫に アイスが 冷えた。)
　　b. 男が 庭に 倒れていた。　(*男が 庭に 倒れた。)

これらの例から，K テイルは場所項を選択する能力があることが分かる。

しかし，ニ格項は常に容認されるわけではないことに注意しよう。次の例ではニ格場所項が容認されない。

(37) a. (*裏庭に) 太郎が もう 薪を 割っていた。
　　b. (*自分の部屋に) 太郎が もう 電話を 切っていた。

(35 b)，(36) と (37) の文法性の違いがなぜ生じるのかは明らかでないが，V 1 が非対格的である方が文法性が高いように思われる。ニ格場所項の選択には意味的制約が働くようである。

三原は，D テイルがニ格場所項を選択することはできないとするが，この観察は正しくない。実際，工藤 (1982)，Nakajima (2000) にはニ格場所項を選択する D テイルの例が挙げられている[6]。

(38) a. 公園には たくさんの子ども達が 遊んでいる。
　　b. このビルの 2 階には 高齢者が 働いている。
　　c. 教室には 新入生が 待っている。　(Nakajima (2000 : 99))

6　ただし工藤は，(38) のような例が実際の運動 (つまり D テイル) を表さず，「存在文化」(p. 83) していると述べる。

Nakajima は論じていないが，この場合にも強い意味的制約がかかる。例えば，次のような例は全く容認されない。

（39）a．*公園に（は）　太郎が 遊んでいる。
　　b．*公園に（は）　たくさんの子供たちが 笑っている。

ニ格場所項が現れるとき，主語が（38 a–c）のように不特定多数である方が容認度が高いようである。（39 a）はそれが満たされず，容認されない。また，V 1 にも制約があるようで，（39 b）の「笑う」のような動詞とニ格場所項は共起しない。

三原，Nakajima の例を合わせて考えると，D テイルと K テイルはいずれもニ格場所項を選択する潜在的能力がある。それぞれに課される意味的制約は不明だが，いずれにしても，「ニ格場所項をテイルが選択する可能性がある」点では D テイル，K テイルとも同じであり，選択特性に違いがあるとは言えない。

4.1.2　主語と否定のスコープ関係の違い

三原は，D，K テイル文の主語が異なるスコープ解釈を持つことを，次の例で観察している[7]。

（40）D テイル
　　太郎だけが 走って（は）いない。　（だけ＞＜ない）
　　（三原（1997：155））

（41）K テイル
　　a．安物の皿だけが 割れて（は）いない。
　　b．東側の壁だけが 壊れてはいない。

7　3.2 節で論じたとおり，とりたて詞を伴う句が最上位項であればフォーカス解釈をうけ，統語位置に関係なく広いスコープを取る。（40）の狭いスコープ読みは，「V 1＋テ」に対比の「は」が後続する方が得やすい。これは，「vP 1＋は」がより上位のフォーカス句となり，「～だけ」がフォーカス解釈を受けないからだろう。同じ効果は，文全体を埋め込み文にすることでも得られる。ダケ句がフォーカス解釈されるとその統語位置を知るテストにならないので，そうならないよう，例文の V 1＋テに「は」を後続させるか，「こと」を最後に補って埋め込み節にする必要がある。

c．電話の回線だけが 切れてはいない。　（だけ＞ない）

（三原（1997：156））

三原によると，（40）では「（走っていない）のは太郎だけだ」という，主語が否定よりも広いスコープをとる読み，「（走っているのは太郎だけ）ではない」という，否定が主語よりも広いスコープをとる解釈の両方が可能である。一方，（41 a）では「（壊れていない）のは安物の皿だけだ」という解釈のみが可能であり，「（壊れているのは安物の皿だけ）ではない」という解釈は許されない。（41 b，c）でも同様，主語が常に広いスコープ読みを持つ。

この対比は，（34 a，b）の分析を用いて説明することができる。（40）の D テイル文において，主語は vP 1 に生起するため，もともとは主節の否定辞よりも下にある。それが（主語移動またはかきまぜにより）繰り上がれば否定辞より広いスコープをとることができるし，生起位置に再構築されれば狭いスコープ解釈となる。一方，（41）の K テイル文において，主語は主節に生起し，埋め込み主語位置の PRO をコントロールする。PRO 位置に再構築されることはないため，主語は常に広いスコープ解釈となる。

三原分析ではこのように，（40），（41）の解釈可能性の違いを簡潔に説明することができる。しかしながら，（40），（41）では，主語の構造が異なっており，対比するデータとして不適切である。解釈の違いは主語の位置でなく主語の内部構造の違いによる，という批判があり得るからである。（41）の主語はいずれも「A の B」という形をしているが，多重主語構文でこの形の大主語が現れると容認度が著しく下がる（cf．小林 2010, 2011）。

（42）a.　そのメーカーが　グラフが［[e]ノ ラケット］-を 愛用している。

b.　*そのメーカーのラケットが グラフが [e]ヲ 愛用している。

（杉本（1995：88））

（43）a. ??/*フランス人が［[e]ノ 数学の 教師］-が 一人いる。

b.　*フランス人の数学が［[e]ノ 教師］-が 一人いる。

（Takami and Kamio（1996：223））

小林（2011）はこの事実を，次の大主語特徴づけ制約を用いて説明する。

（44）文脈から設定される比較可能な指示物の集合（□＝{A，B，C，D…}）のうち，大主語である A は文述語によって，他のメンバーから際だつ特徴を与えられる。（小林（2011 : 55））

（42 a），（43 a）の大主語の場合，対比されるメンバーを設定することは比較的容易である。例えば（42 a）だと，「いろんなメーカー」の集合を設定すればよい。すると，文述語（「グラフがラケットを使用している」）が当てはまる唯一のメンバーとして，「そのメーカー」が際立つ。（43 a）だと，「いろんな国籍の人」の集合を設定し，文述語が当てはまる唯一のメンバーとして「フランス人」が際立つ[8]。

しかし，大主語が「A の B」という複雑な形をとると，このような集合の設定が難しくなることがある。それは，A，B についての対比物の集合をそれぞれ設定し，さらにその組み合わせ集合も設定して，「A の B」をこの集合の他のメンバーと対比させる，という煩雑な手順が必要になるからである。例えば，（42 b）では「メーカー」と「製品」の組み合せ，（43 b）では「国籍」と「教科」の組み合せを考えねばならない。もしそれぞれの集合が 4 つのメンバーから成り立っている場合，4×4＝16 のメンバーからなる組み合せの集合を作らねばならない。この煩雑さが大主語の特徴づけ解釈を困難とし，文の容認度を下げるのである。

これと同じことが（41）に当てはまるのかもしれない。つまり，主語が狭いスコープを取るとき，他にも述語の命題が真になるメンバーがあると含意されるが，そのメンバーを含む集合を設定するには上で述べた煩雑な計算をせねばならない。そのコストを嫌って，その必要がない広いスコープ読みが好まれる，という説明も可能である。

こういった批判を避けるためには，（40）のように，主語を単純な形にした K テイルの例文を作って比較する必要がある。筆者による作例を以下に挙げる。

---

8 実際には，不定の大主語「フランス人」は特徴づけを得にくい。容認度の低さはこのためである。しかし，例えば，ある学校に外国人の数学教師が一人いることが分かっているが，どの国の人かは分からない，という文脈があるとしよう。この文脈で（43 a）が発話されると，「フランス人」は他国籍人と対比される総称（generic）解釈により特徴づけられるため，容認度が改善する。

(45) a. 私だけが 間違って(は)いなかった(こと)
b. 金だけが 盗まれて(は)いなかった(こと)
c. 太郎だけが そのツボを買って(は)いなかった(こと)

いずれの場合も，主語が狭いスコープを取ることができると感じられる。つまり，主語のスコープ読みの可能性からでは，D テイル，K テイルの統語的な違いは見られないということになる。

4.1.3 主語のイディオム解釈の可能性

三原の第三のデータは，イディオムをテイル文で表せるかどうかである。三原は次の例を用いて，D テイルと K テイルではイディオム解釈の容認度に違いがあるとする。

(46) D テイル
a. 鬼の居ぬ間にちょっと洗濯をしているだけですよ。
b. 最近の政界は明らかに，悪貨が良貨を駆逐している。
c. お前の行動が寝た子を起こしているのがわからんのか？
d. 今日は暇だなあ。朝から閑古鳥が鳴いている。
e. 僕らの間には数ヶ月前から秋風が吹いていた。　(三原（1997：153))

(47) K テイル
a. *おやおや，噂をすれば影がさしているよ。
b. *課長は頭が切れている。
c. *瓢箪から駒が出ている。
d. *船頭多くして船山に登っている。
e. *笑う門に福が来ている。
f. ??10 年も経つのに，娘の亭主はうだつが上がっていない。
g. ??別れたと聞いていたのに，いつの間にか覆水が盆に返っている。
h. ??親の因果が子に報いている，といったところかな。
i. ?彼の論文は，いつも痒いところによく手が届いている。
j. ?あれあれ，猿が木から落ちているよ。　(三原（1997：154))

(47) の文法性判断に個人差が大きいことは三原自身認めているが，全体とし

て容認度に差が見られることから，2つのテイル構文が異なる統語構造を取る証拠であると主張する。三原分析では，Dテイルは繰り上げ述語であるため，イディオム要素（idiom chunk）である主語はS 1から繰り上がる。繰り上がる前はS 1でイディオムが構成素をなすため，イディオム解釈が可能である。一方，Kテイル文の場合，主語はS 1の外に生起する。よって，この主語はS 1のイディオム要素と構成素をなさず，イディオム解釈ができない。ゆえに，(47)では全般的に容認度が下がる。このように，イディオム解釈の容認度の違いは，三原分析により簡潔に説明することができる。

しかしながら，これらのデータにも問題がある。まず，（46 a，c）の例は主語がイディオム要素でないので，そもそもテストになっていない。次に，(46)，(47)の多くの例に時間幅をとる副詞句が含まれており，これも不適切である。D, Kテイルはいずれも瞬間的な言及時にその状態が持続していることを表すのであるから，（46）にある「～間に」「最近」「朝から」「数ヶ月前から」，あるいは（47）にある「10年も経つのに」「いつも」といった時間副詞と共起させるべきでない。第三に，（47 a）は条件文のイディオムだが，これもテスト材料として問題がある。条件文とD, Kテイルは共起しないからである。

（48）a．*おやおや，太郎はお腹がすいたらご飯を作っているよ。（Dテイル）
　　b．*おやおや，悪口を言えば彼が現れているよ。（Kテイル）

つまり，（47 a）の非文法性はイディオムとは関係がない。（47 d，e）にも同じ批判が当てはまるかもしれない。「船頭多くして」「笑う門には」もある種の条件を表すからである。さらに，（47 b）の「切れる」は可能動詞であり，状態動詞の性質を持つ。状態動詞にテイルが付かないのは当然である。

このように，三原の用いるイディオムデータには問題が多く，DテイルとKテイルの主語位置の違いを論じる根拠とすることはできない。上の問題を回避するには，(i) 主語もイディオム要素であるイディオム，(ii) テイルとの共起を妨げない形式を持つイディオム（つまり，条件節や可能動詞を含まないイディオム）を使ってテストを行う必要がある。また，「今」や「おやおや」のような副詞・間投詞を使って，言及時が瞬間的であることを保証する方がよいだろう。そのような例文を作って，Dテイル文とKテイル文がイディオムを含むことができるかどうか，再度比べてみよう。

(49) D テイル

a. 今まさに，食指が 動いている。

b. 泣いたカラスが もう 今 笑っている。

(50) K テイル

a. おやおや，課長の堪忍袋の緒が 切れているぞ。

b. 今 彼は 眉に 火が 点いている。

c. おやおや，ミイラ取りが ミイラに なっているぞ。

筆者には，いずれの例も容認されると感じられる。つまり，D，K テイルとも，イディオムを含む例を作ることができる。結論として，どちらのテイル文の主語も埋め込まれた述語句内に生起すると考えられる。

4.1 節の議論をまとめると，D テイルと K テイルが統語的に異なるふるまいをするという三原（1997）の観察には問題があり，より適切なデータをもとに再検討すると，むしろ 2 つとも繰り上げ述語であると分析すべきであることが示された。

4.2 Ogihara の分析と問題点

この節では，Ogihara（1999）の分析を検討する。彼は，効力持続のテイル文は D テイル文と異なり，ガ格主語の中立叙述ができないことを指摘する。

(51) D テイル文：中立叙述が可能

a. 太郎<u>が</u> 今 木を 倒している。

b. 太郎<u>が</u> 今 ヨーロッパを 旅行している。

(52) 効力持続のテイル文：中立叙述が不可能＝ガ格主語が総記の解釈を受ける

a. 太郎<u>が</u> 今までに 本を 10 冊も 書いている。

b. 太郎<u>が</u>　去年　ヨーロッパに　行っている。（Ogihara（1999：338））

Ogihara では扱われていないが，他の解釈のテイル文でも中立叙述が可能である。

(53) a. 財布が 落ちている。 (K テイル)
b. 太郎が 結婚問題で 悩んでいる。 (状態持続)

(51), (53) と (52) の解釈可能性の違いは何を表すのだろうか。Kuroda (1965), 久野 (1973) によると, 総記の解釈は, 述部が普遍的な性質を表すときに義務的となる。

(54) [総記] のマーキング (主文では, 義務的に適用される) : 文の述部が状態又は普遍的・習慣的動作を表わし, 文頭の「名詞句+ガ」に数詞, 数量詞が含まれていない場合には, その名詞句に [+総記] のマークを附せ。
(久野 (1973 : 41))

Ogihara はこれをもとに, 次の主張を行う。D テイルは場面レベル (stage–level) の述語であるが, 効力持続のテイルは個体レベル (individual–level) の述語である。ゆえに, (52) で総記解釈が義務的となるのである。

もしこの考えを Diesing (1992) の分析に組み込むとすると, 場面レベルの D テイルは繰り上げ構造, 個体レベルの効力持続テイルはコントロール構造を作ると考えることができる。つまり, 三原 (1997) の分析とは区別の線引きが異なるものの, テイル文は繰り上げ・コントロールの 2 とおりがあるということになる。

しかし, (51), (52) の違いは本当にテイルの語彙的な違いを表していると言えるのだろうか。次の例を見てみよう。

(55) a. 太郎が フランス語を 話した。 (中立叙述が可能)
b. 太郎が フランス語を 話す。 (総記解釈のみ)

「話す」は明らかに場面レベルの述語である。(55 a) では主語の中立叙述が可能だが, (55 b) では総記解釈しか許されない。この違いは言及時の違いからもたらされる。つまり, (55 a) のように言及時が過去のある特定時を指すのであれば,「話した」はその時の偶発的な事象を表す。しかし, (55 b) のような単純非過去の文では特定時が設定されず, 文は個別的な事象を表すことができない。このような場合は, 述語が何であれ, 文は状態・性質を表し (Cowper

(1998 : 12))，主語の総記解釈が義務的になる。つまり，(54) の「述部」とは時制（あるいは言及時の時間幅）も含めて考える必要がある。

これを踏まえて (51)，(52) の例に戻ろう。(51) の文は明らかに，発話時という瞬間的な時点で観察される特定の事象（特定の動作の持続）を述べている。しかし，(52) の文はそうではなく，広い時間幅の中に存在する何らかの効力の存在を述べている。(55 b) で見たとおり，特定の事象を述べない場合，述語のタイプによらずガ格主語は総記解釈を持つ。つまり，(52) は，述部全体が個体レベルであることを示す証拠であるとは言えるが，語彙述語（テ）イルが個体レベルであることを示す証拠とは言えない。

まとめると，テイル文のガ格主語の解釈可能性に違いはあるものの，それをデータにしてテイルの語彙的な性質が異なると主張することはできない。従って，Ogihara のデータは複数の語彙素テイルがある証拠とはならない。

4.3　まとめ

以上，3 節と 4 節で先行研究が提案するテイル文の分析を検討したが，いずれも概念的・経験的な問題が多く支持できないことが分かった。検討する中で明らかになったことをまとめる。

(56) D テイル，K テイルの解釈に関係なく，テイルは次の性質を持つ。

a. 述語句を選択し，次のような埋め込み構造を作る。
［TP［vP2［vP1　外項　内項　(…)　V1］-て　いる］　T］

b. 場所項を選択することができる。(ただし，意味的制約がかかる。)

c. その他の項は V 1 の選択特性により vP1 に生起する。つまり，いわゆる繰り上げ述語である[9]。主語は vP1 にとどまり，そこで解釈されてよい。

d. 外項は，(一見) VP1 内にある FNQ を認可することができる。

(56 a–c) はテイルの語彙的特性とすることができるが，(56 d) の性質がどうして観察されるのかはまだ明らかでない。

9　正確に言うと，日本語には EPP がなく主語が繰り上がる必要はない。コントロール述語でない，という意味で「繰り上げ述語」としている。

ここまでの議論から考えると，D テイルと K テイルを別の語彙項目であるとする（3 b）の立場を支持する積極的な理由はない，という結論になる。しかしながら，5 節で新たに導入するデータから，2 つのテイル構文にはやはり違いがあることが示される。これを説明するため，（3 c）に基づく分析を提出し，5 節のデータおよび（56 d）の性質を説明する。

5. 提案

5.1 新たなデータ

この節では，テイルの下にある述語句が等位接続される文を作り，その可能な解釈を見ることで D テイル文と K テイル文が統語的に異なることを示す。まず，次の非テイルの等位接続文を見てみよう。

（57）a. ［太郎が歌い］，［花子が踊っ］ た。 （連用形）
b. ［太郎が歌って］，［花子が踊っ］ た。 （テ形）

述語句を並列するとき，前等位項が連用形になる場合と，テ形になる場合がある。これらの例はいずれもあいまいで，歌い踊るのがたまたま同時に起こる読み，継起・因果関係がある読み（つまり，「太郎が｛歌った後で・歌ったから｝花子が踊った」）の両方が可能である。前者を「独立同時読み」，後者を「継起・因果読み」と呼ぶことにする。

これらの読みのとき，どういう構成素が並列されているか考えよう。本稿は，Stowell（2008），Zagona（2007, 2008）などに従って，時制を指定する T（ense）以外にも言及時や事象時を指定する投射があると前提する。言及時の指定に関わる投射を Asp（ect）P とする[10]。また，等位項同士は同じカテゴリー（か同じ θ 役割）でなければならない（cf. Féry and Hartmann 2001）。

継起・因果読みの場合は，AspP が等位項であると考えられる。2 つの等位項に異なる言及時が設定されるため，2 つの事象が異なる時に起こったことになる。聞き手は，異なる事象が並列して述べられることには何らかの意味があると語用論的に推量するので，等位項の間に継起または因果の解釈を与える[11]。

---

10 Zagona（2007）に従い，AspP–Spec にある演算子（OP）が言及時を指定すると考える。

11 Dowty（1986）は，事象文 A, B, C… が文脈に現れると，A→B→C→ … というよう

一方，独立同時読みの場合は AspP よりも小さい述語句（vP）が並列されると考える。等位接続された vP の上に 1 つの AspP（言及時）が現れ，2 つの事象の言及時が共有される。相がパーフェクトでなければ言及時＝事象時であるので（Reichenbach 1947），同じ事象が同時に起こる解釈となる。一方，パーフェクトでは「事象時＿言及時」であるので，2 つの事象は同じ言及時の前のどこかの時点で起こる。しかし，並列される 2 つの事象（vP）の時間的関係は未指定である。ゆえに，2 つの事象が（いつかは分からないが）バラバラに起こり，その結果がたまたまどちらも言及時に残存している，という読みが得られる。

これを踏まえて，テイルの下に 2 つの述語句を並列する独立同時読みができるかどうか見てみよう。まずは連用形接続から考える。アスタリスク（*）は，独立同時読みができないことを表す。

（58）D テイル＋D テイル：独立同時読み OK

a.［太郎が歌い］，［花子が踊っ］ている。（＝［花子が踊り］，［太郎が歌っ］ている。）

b.［太郎が本を読み］，［花子がテレビを見］ている。
（＝［花子がテレビを見］，［太郎が本を読ん］でいる。）

（59）K テイル＋K テイル：独立同時読み OK

a.［窓が開き］，［花瓶が倒れ］ている。（＝［花瓶が倒れ］，［窓が開い］ている。）

b.［太郎が酔いつぶれ］，［花子が帰っ］ている。
（＝［花子が帰り］，［太郎が酔いつぶれ］ている。）

（60）D テイル＋K テイル：独立同時読み×

a. *［太郎が笑い］，［花子がワインを飲み干し］ている。

b. *［太郎が本を読み］，［花子が帰っ］ている。

（61）K テイル＋D テイル：独立同時読み×

a. *［花子がワインを飲み干し］，［太郎が笑っ］ている。

b. *［花子が帰り］，［太郎が本を読ん］でいる。

に，言及時が文ごとに後ろにずれていくことを観察している。つまり，継起解釈である。また，前後関係と因果関係がしばしば混同されるように（*post hoc ergo propter hoc*），その継起関係に因果の存在を感じ取ることもありうる。

(60)，(61) は，継起・因果読みならば容認される可能性がある。例えば，(60 b) だと，「太郎が本を｛読んだ後で・読んだので｝花子が帰ってしまっている」という読みならば問題ない。しかし，独立同時読み（「現在，太郎が本を読んでおり，かつ，花子が帰ってしまった状態である」）は不可能である。

一方，(58)，(59) は独立同時読みが可能である。例えば (58 a) では，太郎が歌う動作と花子が歌う動作がともに発話時に進行中であることを表す。(59 a) では，窓が開いた状態であることと，花瓶が倒れた状態であることがともに発話時に観察されることを表す。この場合，2 つの状態変化が起こった事象時（つまり，窓が開いた瞬間と，花瓶が倒れた瞬間）は不明である。重要なのは，(59 a) では等位項同士に継起・因果関係のない読みをしてもよい，ということである。すなわち，「窓が｛開いたから・開いた後で｝花瓶が倒れた」という含意のない，2 つの結果状態の存在をただ述べている解釈をしてよい，ということである。この解釈のときは，等位項を入れ替えて「花瓶が倒れ，窓が開いている」としても同じ意味になる。

次に，テ形の述語句が接続するテイル文の独立同時読みの可能性を検討する。

(62) D テイル＋D テイル：独立同時読み OK

a. ［太郎が歌って］，［花子が踊って］いる。
（＝［花子が踊って］，［太郎が歌って］いる。）

b. ［太郎が本を読んで］，［花子がテレビを見て］いる。
（＝［花子がテレビを見て］，［太郎が本を読んで］いる。）

(63) K テイル＋K テイル：　独立同時読み×

a. *［窓が開いて］，［花瓶が倒れて］いる。
（≠［花瓶が倒れて］，［窓が開いて］いる。）

b. *［太郎が酔いつぶれて］，［花子が帰って］いる。
（≠［花子が帰って］，［太郎が酔いつぶれて］いる。）

(64) D テイル＋K テイル：　独立同時読み×

a. *［太郎が笑って］，［花子がワインを飲み干して］いる。

b. *［太郎が本を読んで］，［花子が帰って］いる。

(65) K テイル＋D テイル：　独立同時読み×

a. *［花子がワインを飲み干して］，［太郎が笑って］いる。

b. *［花子が帰って］，［太郎が本を読んで］いる。

(63)-(65) はいずれも独立同時読みができず，継起・因果関係を表す解釈でのみ容認される余地がある。つまり，テ形並列の場合，独立同時読みができるのはDテイルとDテイルが結びつくときだけである。興味深いことに，どちらもKテイル同士の並列でありながら，(59)と(63) の容認度は異なる。独立同時読みは連用形接続の (59) では可能であるが，テ形接続の (63) では不可能である。

(63) の解釈について注意すべきことが一つある。例えば (63 a) でも，「窓が開いた状態であること」と「花瓶が倒れた状態であること」という2つの結果状態は発話時に同時に存在するので，結果の「同時読み」は成立する。しかし，等位項の事象には継起・因果の関係が必ずある（つまり，「窓が｛開いた後で・開いたから｝花瓶が倒れた」)。従って，(63) は独立同時読みではない。この読みがないので，(63) では意味を変えずに等位項の順序を入れ替えることはできない。

5.2　分析

以上のデータがテイル文の構造について何を示唆するのか考えていこう。まず，(60)，(61)，(64)，(65) に独立同時読みがないことから，テイルはDテイルかKテイルどちらかの読みしか取れないことが分かる。もし，((3 a) に沿って) DテイルとKテイルが語彙的にも統語的にも区別されず，vP 1 との組合せによって意味解釈部門で然るべき解釈を割り当てられると考えるならば，次の図のようにテイルが2つの解釈を持つことに問題はないはずであり，テイルの解釈が限定される事実を説明するのが難しくなる。

(66)　［vP 1 太郎が笑い］［vP 1 花子がワインを飲み干し］ている

これらの例を扱うためには，テイル文はやはり統語的に区別されると考える方が妥当である。つまり，DテイルとKテイル文を構成する統語構造が異なるので，等位接続できないと考えるのである。

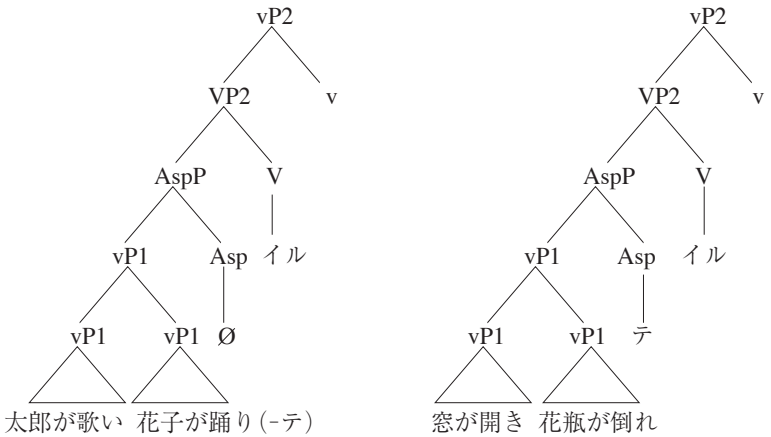
では，それぞれどのような統語構造になるのだろうか。それを考えるヒントになるのが (59)，(63) である。(63) のテ形Kテイル並列は，(59) の連用

形 K テイル並列と異なり，独立同時読みができない。上で述べたとおり，等位項が異なる言及時を持つと，継起・因果関係が推意されてしまう。ゆえに，独立同時読みされる（59）では AspP よりも小さい述語句（vP）が並列され，継起・因果読みされる（63）では AspP が並列されると考えられる。前等位項に現れるテが（59）と（63）の違いをもたらすことから，AspP の主要部はテであると見なせる。

一方，（62）のテ形 D テイル並列は，（58）の連用形 D テイル並列と同じく，独立同時読みが可能である。つまり，D テイルのテは Asp でない。おそらく，助動詞イルが V 1 に接続する際，形態論的理由から挿入されると思われる。

以上を踏まえて，（58）-（65）のデータを説明しよう。まず，連用形接続の場合から考える。（58），（59）が独立同時読みを持つとき，vP が並列されるはずなので，それぞれ次のような構造になるだろう。

（67）a. D テイル＋D テイル　　b. K テイル＋K テイル



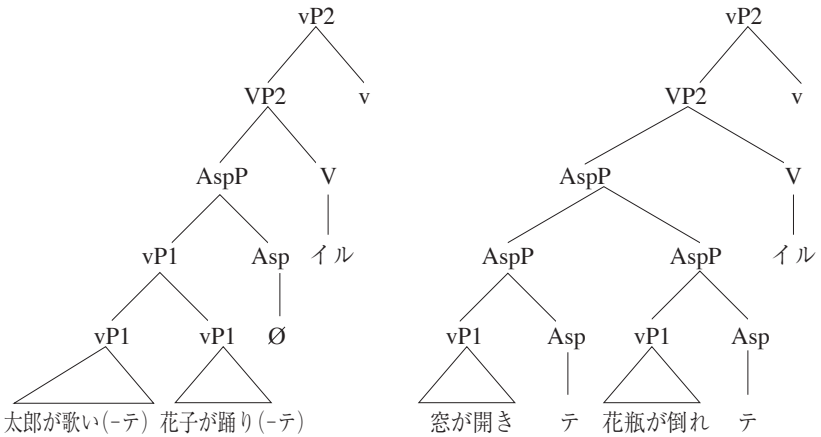
まず D テイルが並列する（67 a）の場合を見る。並列されるのは vP1 である。その上に AspP が現れるが，主要部は音形を持たない。音韻表示で後等位項の V 1 とイルが接続するとき，直接結びつくことができないので，テが挿入される。従って，テは統語表示には存在しない。音形を持たない Asp は，寺村の言うところの「開始の既然」に関わり，これと結びつくイルは D テイル解釈を持つ。この構造では，2 つの vP1 が一つの AspP に支配される。よって，2

つの事象が同時に起こるという解釈になる。

次に，K テイルが並列する（67 b）の場合を見る。こちらも並列されるのは vP1 である。その上に AspP が現れるのも同じだが，その主要部はテである。この Asp は，寺村の言う「終了の既然」に関わり，これと結びつくイルは K テイルの解釈を持つ。この構造においても，並列される vP1 自体に時に関わる投射がないので，vP1 の間の時間関係は不定である。構造から分かるのは，「窓が開く」「花瓶が倒れる」事象がどちらも終了し，その結果が発話時に残存していることである。vP1 間の時間関係が不定であるため，独立同時読みが可能となる。

次に，テ形接続の場合を考えよう。（62 a），（63 a）の構造は次のようになるだろう。

（68）a. D テイル＋D テイル　　b. K テイル＋K テイル



（68 a）であるが，D テイルのテは統語構造に実体がないので，テ形の等位接続の場合も vP1 並列構造を考えることができる。テは，今度は等位項それぞれに挿入される[12]。この構造は（67 a）と同じであるから，同じ操作により，

12　動詞句以上の大きさの構成素が並列されるとき，等位項の最後に付加するある種の助詞は，後位等位項にだけ現れてもよいし，両方の等位項に現れてもよい。そのような例を他にもいくつか挙げる。

（ｉ）太郎は　［花子に　リンゴ（-を）］，［優子に　ミカン-を］　あげた。

独立同時読みが可能となる[13]。

次に（68 b）を考える。K テイルのテは AspP の主要部であり，テ形並列とは AspP 並列を意味する。この場合，「窓が開く」「花瓶が割れる」ことがともに終了（テ）し，その結果が残存（イル）することを表すのだが，2 つの事象は異なる AspP に支配される。つまり，2 つの等位項に異なる言及時が設定され，異なる事象として述べられる。異なる事象が並列されれば継起・因果読みが推意されるので，独立同時読みにはならない。

まとめると，D テイルと K テイルの構造は次のようになる。

（69） a．D テイル：[$_{vP2}$ [$_{VP2}$ [$_{AspP}$ [$_{vP1}$ 太郎が 歌い(−テ)] [$_{Asp}$ Ø]] イル]]
b．K テイル：[$_{vP2}$ [$_{VP2}$ [$_{AspP}$ [$_{vP1}$ 太郎が 来] [$_{Asp}$ テ]] イル]]
（＝（4））

イル自体は「持続」を表す同じ語彙項目であるが，どういう AspP と結びつくか選択肢が 2 つある。（69 a）のように主要部 Ø の AspP を選ぶとイルは「開始の結果の持続」すなわち D テイルの解釈を持つ。このとき，イルは V1 に直接接続できないので，音声表示のレベルでテが挿入される。（69 b）のように主要部テの AspP を選ぶとイルは「終了の結果の持続」すなわち K テイルの解釈を持つ。このように，イルは 1 つの語彙項目であるが，AspP は 2 つあるので，その統語的な組み合わせから 2 つの意味が生じるのである。

5.3 残ったデータの説明

3–4 節で先行研究を検討した結果，D，K テイルとも繰り上げ述語であるとの結論を得た（cf.（56 a–c））。これは提案した分析（69 a，b）に組み込まれているが，（56 d）（（70）として再掲）の性質がなぜ生じるのかはまだ明らかでない。

（70）外項は，（一見）VP1 内にある FNQ を認可することができる。

（ⅱ）[花子が 歌い（-も)]，[太郎が 踊り-も] した。
（ⅲ）[花は 盛りに（-のみ)]，[月は 隈なきを-のみ] 見るべきかは

13 もちろん，（62）でも AspP の並列構造を立てることは可能である。この場合は継起・因果読みになる。重要なのは，（62）は独立同時読みもできる，という事実である。

また3節で，日本語にEPPがないことを論じたときに挙げたデータ（28）-（31）の文法性もまだ説明していない。D，Kテイルとも統語的な埋め込み関係は同じであるので，ここではKテイルの（31）（（71）として再掲）のみを例に取り上げる。

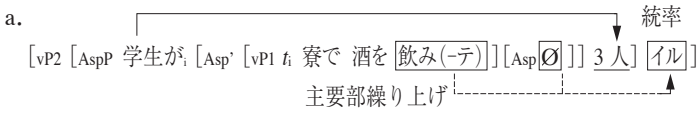
（71）a.　*誰が　その小包を　受け取り-も　しなかった。
　　b. ?*誰が　その小包を　受け取り-も　していなかった。
　　c.　誰が　その小包を　受け取って-もいなかった。　（Kテイル）

最後に，本稿の分析でこれらの性質がいかに説明されるかを考えよう。

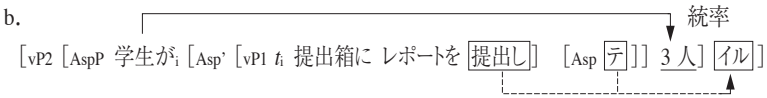
まず，テイル文の外項が（一見）VP1内にあるFNQを認可できる事実はどのように説明できるだろうか。本稿の分析によると，非テイル文とテイル文の違いは，後者においてのみAspP埋め込み構造があることである。これがFNQ認可の違いをもたらしているはずであるので，「FNQはAspPに付加する」と考えてみる。すると，（72 a, b）の構造は（73 a, b）のように分析できる。

（72）a.　学生が　寮で　酒を　3人　飲んでいる。　（Dテイル）
　　b.　学生が　提出箱に　レポートを　3人　提出している。　（Kテイル）

（73）a.



b.



テイル文の外項はvP1内にでき，そこにとどまることができるが，とどまらねばならないわけではない。随意的移動により，AspP（やさらにその上）に移動することもできる。上の図は，外項「学生が」がAspP–Spec（または付加位置）に移動したときの構造を表している。FNQはAspP付加位置に現れているが，外項DPはこのFNQを統率・認可できる[14]。なお，四角で括った主要部

[14] 「統率」の概念が極小理論の枠組みで不適切だとするならば，次のように言い換えてもよい。
（i）FNQは認可子のDPに直接付加するか，TP/AspPのような時制・相の投射にのみ付

は繰り上がって（72 a，b）の表層語順となる。

この分析から，次の予測が成り立つ。AspP を埋め込む他の繰り上げ構文においても，同様に外項 DP が離れた FNQ を認可できるはずである。次の例を見る限り，予測は正しい[15]。

（74）a．学生が 本を 3 人 読み 始めた。
　　b．学生が 本を 3 人 読み 続けた。
　　c．学生が レポートを 3 人 提出し 直した。

ゆえに，（70）の事実を，（テ）イルが Asp を埋め込むことと関連づけて説明することは妥当であると思われる。

次に，（71）のデータを考えよう。Hiraiwa（2005）は動詞に後続するモは vP 付加であるとするが, 彼の分析は EPP の存在を前提とするため問題である。「モは不定語を c-統御する」という認可条件を変えないとすると，（71 a）の非文法性は次のように説明できる。

モは VP には付加できるが，vP には付加できないと考えよう。すると，（71 a–c）の構造は次のように分析される。（モが c-統御する領域に影を付けて示す。）

（75）a．*［$_{vP1}$ 誰が ［$_{VP1}$ その小包を受け取り］-も v］（し）なかった
　　b．*［$_{VP2}$［$_{AspP}$［$_{vP1}$ 誰が ［$_{VP1}$ その小包を受け取り］-も v］Asp］（し）てい］なかった
　　c．［$_{VP2}$［$_{AspP}$［$_{vP1}$ 誰が［$_{VP1}$ その小包を受け取っ］v］て］-も い］なかった。

加できる。
（ii）認可子 DP は同じフェイズにある FNQ を c-統御することで認可する。
（73 a，b）では（i），（ii）が満たされるため（72 a，b）が容認される。なお，非テイル文（「*［$_{vP}$ 学生が［$_{VP}$ 酒を 3 人 飲ん］］だ」）では，vP–Spec の外項が VP 内を見ることができるので（ii）は満たされるが，（i）が満たされないため容認されない。つまり，VP 内には FNQ の付加できる投射レベルがないのである。

15 「そうし｛始める/続ける/直す｝」など，「そうする」置き換えが可能であることから，いずれも統語的な複合述語であり，埋め込み構造をなすと判断できる。

V1 連用形に後続するモは，VP1 に付加する。外項は vP 内にできるので，（75 a，b）の不定語は当然モから認可を受けず，非文となる。（75 c）では，テにモが後続することから，モは AspP に付加していると考えられる。AspP の下に外項「誰が」が生起するのだから，この不定語はモから認可を受け，（75 c）は容認される。

6.　結論

本稿では，D テイル文と K テイル文の統語構造を明らかにした。イルの語彙素は 1 つであり，「既然の結果の持続」を表す。ただし，イルと結びつく AspP の選択肢には 2 つある。ゼロ形主要部の AspP は「開始点」を表し，それと組み合わさってできる（テ）イルは D テイルの解釈を持つ。このとき，形態論的理由からテが挿入される。一方，テが主要部である AspP は「終了点」を表し，それと組み合わさってできるテイルは K テイルの解釈を持つ。つまり，D テイル・K テイルの解釈は統語的な反映を持つのである。

D テイルと K テイルは以上の点では異なるが，他の点では同じである。両方ともいわゆる繰り上げ構文を作る。外項は vP1 に生起し，そこにとどまることができる。また，外項が（一見）VP1 内にある FNQ を認可できる点で非テイル文と異なる性質を持つが，FNQ は AspP に付加すると考えてデータを説明することができる。

参照文献

Cowper, Elizabeth（1998）The simple present tense in English : A unified treatment. *Studia Linguistica* 52 : 1–18.

Diesing, Molly（1992）*Indefinites*. Cambridge, MA : MIT Press.

Dowty, David R.（1986）The effects of aspectual class on the temporal structure of discourse : Semantics or pragmatics? *Linguistics and Philosophy* 9 : 37–61.

Féry, Caroline and Katarina Hartmann（2001）Focus and prosodic structure of German gapping and right node raising. Ms. Universität Potsdam & Humboldt Universität Berlin.

藤井正（1966）「「動詞＋ている」の意味」『国語研究室』東京大学．［金田一（編著）（1976）に再録．pp. 97–116.］

Hiraiwa, Ken（2005）Indeterminate–agreement : Some consequences for the Case

system. *MITWPL* 50 : 93–128.
岩本遠億（2008）『事象アスペクト論』東京：開拓社.
金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』15 : 48–63.［金田一（編著）（1976）に再録. pp. 5–26.］
金田一春彦（編著）（1976）『日本語動詞のアスペクト』東京：むぎ書房.
小林亜希子（2009）「とりたて詞の極性とフォーカス解釈」『言語研究』136 : 121–151.
小林亜希子（2010）「多重主語構文（前編）」『島大言語文化』29 : 77–122.
小林亜希子（2011）「多重主語構文（後編）」『島大言語文化』31 : 53–109.
工藤真由美（1982）「シテイル形式の意味記述」『人文学会雑誌』13（4）: 51–88. 武蔵大学.
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト』東京：ひつじ書房.
久野暲（1973）『日本文法研究』東京：大修館.
Kuroda, S.–Y.（1965）Generative grammatical studies in the Japanese language. Doctoral dissertation, MIT.［Published in 1979. NY : Garland.］
三原健一（1994）『日本語の統語構造』東京：松柏社.
三原健一（1997）「動詞のアスペクト構造」鷲尾龍一・三原健一（著）『ヴォイスとアスペクト』108–186. 東京：研究社.
Miyagawa, Shigeru（1989）*Structure and Case marking in Japanese*. NY : Academic Press.
Miyagawa, Shigeru（2010）*Why agree? Why move?* Cambridge, MA : MIT Press.
Miyamoto, Yoichi（2006）On Heig/Kuroda's generalization. 関西言語学会第 31 回大会（甲南大学）発表ハンドアウト.
Nakajima, Heizo（2000）On *niwa…teiru* constructions. In : Ken–ichi Takami, Akio Kamio and John Whitman（eds.）*Syntactic and functional explorations in honor of Susumu Kuno*, 99–113. Tokyo : Kurosio.
Ogihara, Toshiyuki（1999）Tense and aspect. In : Natsuko Tsujimura（ed.）*The handbook of Japanese linguistics*, 326–348. Malden, MA : Blackwell.
奥田靖雄（1978）「アスペクトの研究をめぐって」『教育国語』53 : 33–44, 54 : 14–27.（奥田靖雄（1985）『ことばの研究・序説』東京：むぎ書房に再録. pp.105–143.）

Reichenbach, Hans（1947）*Elements of symbolic logic*. London : Macmillan.

Shirai, Yasuhiro（2000）The semantics of the Japanese imperfective *-teiru* : An integrative approach. *Journal of Pragmatics* 32 : 327–361.

Stowell, Tim（2008）Where the past is in the perfect. In : Ángeles Carrasco Gutierrez（ed.）*Tiempos compuestosy formas verbalescomplejas*（*Lingüistica iberoamaricana* Vol. 34），103–118. Madrid : Vervuet.

杉本武（1990）「日本語の大主語と主題」『九州工業大学情報工学部紀要　人文・社会科学篇』3 : 165–182.

杉本武（1995）「大主語構文と総記の解釈」益岡隆志・野田尚史・沼田善子（編）『日本語の主題と取り立て』81–108．東京：くろしお出版.

Takami, Ken–ich and Akio Kamio（1996）Topicalization and subjectivization in Japanese : Characterizational and identificational information. *Lingua* 99 : 207–235.

高見健一・久野暲（2006）『日本語機能的構文研究』東京：大修館.

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味　II』東京：くろしお出版.

Zagona, Karen（2007）Some effects of aspect on tense construal. *Lingua* 117 : 464–502.

Zagona, Karen（2008）Perfective aspect and “contained perfectivity.” *Lingua* 118 : 1766–1789.